

新しい英語の教材観

神保尚武

英語の教材を作成する時に、応用言語学のさまざまな知見が影響を与える。特に、語用論 (pragmatics) と談話分析 (discourse analysis) とシラバス論は、教材作成者に大きな影響を与えている。

I. 語用論とは何か？

社会言語学者のデル・ハイムズが “There are rules of use, without which the rules of grammar would be useless.” (D. Hymes, 1966: 15) 「言語使用の規則があり、それなしでは文法の規則は役立たない」と喝破してから、言語使用に関する研究が盛んになった。語用論とは、基本的に言語使用の原理を研究する学問である。文法は言語の抽象的形式体系を明らかにしようとするのに対して、語用論は言語使用の原理や規則を明らかにしようとする。両者は、互いに排除しあうものではなく、リーチが指摘するように相補的である (Leech, 1983)。さらに、文法的説明は形式的な性格を持ち、語用論の説明は機能的な性格を有している (Leech, 1983)。語用論は、要約すれば、 “the study of the use of language in communication, particularly the relationship between sentences and the contexts and situations in which they are used” (LDAL) 「コミュニケーションにおける言語使用、特に文が使用される文脈や状況と文の関係についての研

究」(ロングマン応用言語学辞典, 以下「ロングマン」に省略)である。語用論の研究は以下の分野を含むとされている。“(a) how the interpretation and use of UTTERANCE depends on knowledge of the real world (b) how speakers use and understand SPEECH ACTS (c) how the structure of sentences is influenced by the relationship between the speaker and the hearer.”(LDAL)「(a) 発話の解釈と使用はどのように実世界の知識に依存するか。(b) 話し手は発話行為をどのように行ない, 理解するか。(c) 文の構造は, 話し手と聞き手の関係によってどのように影響されるか」(ロングマン)。このような研究が, 教材作成者に大きな影響を与え, より現実に発話されていることばに近いテキストを創作する手がかりを与えている。

II. 談話分析とは何か?

談話とは, “a general term for examples of language use, i. e. language which has been produced as the result of an act of communication” (LDAL)「言語使用, つまり伝達行為の結果として生み出された言語の実例を表す一般用語」(ロングマン)である。談話分析は, “the study of how sentences in spoken and written language form larger meaningful units such as paragraphs, conversations, interviews, etc.” (LDAL)「音声言語と書記言語で, 文がいかにしてパラグラフや会話や対談などのより大きな意味のある単位を形成するかについての研究」(ロングマン)である。主な研究分野として, “(a) how the choice of articles, pronouns, and tenses affects the structure of the discourse (b) the relationship between utterances in a discourse (c) the MOVES made by the speaker to introduce a new topic, change the topic, or assert a higher ROLE RELATIONSHIP to the other participants” (LDAL)「(a) 冠詞や代名詞や時制の選択が談話の構造にどのような影響を与えるか (b) 談話における発話者間の関係 (c) 新しい話題を導入したり, 話題を変えたり, 他の関与者に対してより

高い役割関係を主張するために話し手が行う展開」(ロングマン) などがある。

談話分析の中でも、会話分析がダイアログをテキスト化するとき大いに役立つ。Grice (1967) は、会話の原則として次の4点をあげている。(a) The maxim of quantity: give as much information as is needed. (b) The maxim of quality: speak truthfully. (c) The maxim of relevance: say things that are relevant. (d) The maxim of manner: say things clearly and briefly. (a) 量の原則: 必要なだけの情報を与える (b) 質の原則: 正直に話す (c) 関係の原則: 関係のあることを言う (d) 話し方の原則: はっきりと簡潔に言う。これらの4点は、協調の原則 (the Co-operative Principle) と言うこともある。会話をしている人は、よい関係を維持するために、互いに協力関係にあるという原則である。

III. シラバスの変遷

シラバスは, “a description of a course of instruction and the order in which they are to be taught” 「授業で何を教え, それをどのような順序で教えるかを記述したもの」(ロングマン) である。シラバス (syllabus) ということばの最初の登場が OED によれば1899年であり, 本格的に論議されるようになったのは20世紀中葉からである。

A. シラバスの始まり

英語教育におけるシラバスの萌芽は Harold Palmer (1877-1949) に遡ることができる。パーマーは, まず構造の難易度による配列 (structural grading) を主張した。配列というのは, 容易な段階で既知のものから未知のものへと移っていくこと (passing from the known to the unknown in easy stages) ということである。そして, シラバスということばこそ使用していないが, 「理想的な標準プログラム」(the Ideal Standard Programme) を1917年に発表している。

できる限り母語を使用せずに、口頭作業を中心として、外国語とその意味を直接結びつける習慣を学習者に形成させようとする教授法、即ちオーラル・メソッド (Oral Method) が確立された。英語学習の段階を (three stages) に分け、第1段階は Introductory で identification (照合一致) できること、第2段階は Intermediate で fusion (融合合体) できること、第3段階は Advanced で operation (総合作用) できることである (1921)。この段階を踏んで学習するためには、次の5つの習性を養わなければならないとした (1927)。即ち、1) auditory observation (耳による観察) 2) oral imitation (口による再現) 3) catenizing (口ならし) 4) semanticizing (聴覚像と意味の融合) 5) composition by analogy (類推による文の構成) である。このように、パーマーは、教授法に関しては1つのモデルを提示したが、シラバスに関しては大まかな考え方をしていたにすぎない。

B. シラバスの発展

次に、シラバスの発展に寄与したのは A. S. Hornby (1898-1978) である。ホーンビーは、動詞の用法を 25 verb patterns in tables (動詞の25型) に整理し、構造を難易度で配列した (1959)。その改訂版 (1975) では、冒頭に「序説・話しことば」が加えられ、動詞型の配列が be 動詞、自動詞、他動詞の順に変えられた。なお、第5部の「いろいろな概念とその表し方」は、notional syllabus (概念シラバス) の原型の1つである。

C. シラバスの完成

1940年代の中葉に始まり1970年代の初頭まで続いた audiolingual method あるいは (aural-) oral approach においてシラバスは1つの完成をみた。理論的には Charles C. Fries (1887-1967) などの構造主義言語学と行動心理学の考え方を基盤としていた。その特徴を整理してみよう。まず、基本的な言語材料

(音体系、文型、語彙)を the idea of structural grading (難易度による構造配列の考え方)に基づき提示した。特に、a sentence-pattern grammar (基本的な文法の型)を示し、構造型を successive small steps of contrast (構造の対照の連続的小さな段階)で配列することを原則とした。このようにして、言語材料の指導内容が明示されたことが大きな収穫であった。

D. シラバスの種類

シラバスには基本的に次のような種類がある。

1) Structural Syllabus (構造シラバス)

構造シラバスは、"a syllabus for the teaching of a language which is based on a selection of the grammatical items and structures (eg tenses, grammatical rules, sentence patterns) which occur in a language and the arrangement of them into an order suitable for teaching" (LDAL)「ある言語で生じる文法項目、時制、文法規則、文型など、を選択し、それを教えるのに適した順序に配列した言語教授シラバス」(ロングマン)である。配列の基準は次の通りである。即ち、"The order of introducing grammatical items and structures in a structural syllabus may be based on such factors as frequency, difficulty, usefulness, or combination of these." (LDAL)「構造シラバスでは文法項目と構造を導入する順序は、頻度、難易度、有用性、またはその組み合わせといった要素に基づく」(ロングマン)。その最大の特徴は、linear sequencing of structures「構造の直線的配列」である。極端な構造シラバスにおいては、教材の内容は重要ではない。即ち、Content is immaterial (= not important) in a purely structural syllabus. ということになる。例えば、This is a pen. というような文を場面抜きで提出した時代もかつてあった。

2) Situational Syllabus (場面シラバス)

場面シラバスは、"a syllabus in which the selection, organization, and pre-

sentation of language items is based on situations (eg at the bank, at the supermarket, at home)" (LDAL) 「言語項目の選択・編成・提示が場面、たとえば、銀行で、スーパーで、家庭で、に基づいているシラバス」(ロングマン)である。多くのいわゆる会話テキストはこのようなシラバスを用いている。

3) Situationalized Structure Syllabus (場面化された構造シラバス)

場面化された構造シラバスとは、構造シラバスと場面シラバスを結合させたものである。即ち、The structure is selected from the grading system, then a situation is created that will demonstrate it. 「構造が配列段階から選択され、それを例示する場面が作られる」のである。1950年代と1960年代を通してこのような考え方のシラバスが主流をなしていた。

しかし、1960年代のおわりにはこのシラバスにも多くの疑問が投げかけられるようになった。この事情を Howat (1984: 280) は次のように総括している。

By the end of the sixties it was clear that the situational approach as understood in, for example, the audio-lingual method, had run its course. There was no future in continuing to pursue the chimera of predicting language on the basis of situational events. What was required was a closer study of the language itself and a return to the traditional concept that utterances carried meaning in themselves and expressed the intentions of the speakers and writers who created them. Language is not just a set of structure-habits, nor a collection of situationally sensitive phrases like *Can I help you?* or *How do you do*. It is a vehicle for the comprehension and expression of meanings, or 'notions' as Jespersen called them in 1924, and they were to be called in the new model of syllabus construction being devised in the early seventies. (60年代の終わりになると、例えばオーディオ・リンガルメソッドとして理解されているような場面アプローチはその道程を終了した。場面の出来事を基盤として言語を予測するというような怪物を追い続けるこ

とに未来はなかった。必要だったのは、言語そのものの精密な研究であり、発話はそれ自体に意味があり発話した人の意図を表現しているという伝統的な考え方に回帰することだった。言語は、単に一連の構造と習慣ではないし、「何かご用でしょうか」とか「初めまして」というような場面に感度のよい慣用句の集合でもない。言語は、意味、または、1924年にイエスベルセンが名付け、また1970年代の初頭に作成された新しいシラバス構成のモデルでもそう名付けられた、「概念」の理解と表現の媒体である。

4) Notional-Functional Syllabus (概念・機能シラバス)

概念・機能シラバスとは、"a syllabus in which the language content is arranged according to the meanings a learner needs to express through language and the functions the learners will use the language for" (LDAL) 「言語内容が、学習者が言語を通して表現する必要のある意味と、学習者が言語を使う機能にしたがって配列されるシラバス」(ロングマン) である。このシラバスには以下の項目が含まれる。(a) the meanings and concepts the learner needs in order to communicate (eg time, quantity, duration, location) and the language needed to express them. These concepts and meanings are called notions. (b) the language needed to express different functions or SPEECH ACTS (eg requesting, suggesting, promising, describing) (LDAL) 「(a) 学習者がコミュニケーションを行うために必要な意味や概念、たとえば、時、量、期間、位置、と、それを表現するために必要な言語。これらの概念や意味が概念 (notion) と呼ばれる。(b) 異なった機能 (function) や発話行為、要請、提案、約束、記述など、を表現するために必要な言語」(ロングマン)。このシラバスは、オーラル・アプローチのような言語材料、特に文法中心のシラバスに対する反動として捉えることができる。

5) Integrated (Communicative) Syllabus (統合シラバス)

統合シラバスとは、a syllabus in which 1), 2) and 4) are integrated 「1)と2)

と4)が統合されたシラバス」である。このシラバスで重要な事は、 delicate balancing of structures, situations, notions, functions and topics 「構造と、場面と、概念と機能と主題をうまくかみ合わせる事」である。構造は、直線型 (linear)ではなく、螺旋型 (spiral)に提示される。そして、教材の内容が最重要である (content is decisive)。内容を持たせるためには、意味のある談話やテキストの提示が必須である (presentation of meaningful discourse or text is essential)。最近のコミュニカティブ・アプローチを基盤とする教材作成者は統合シラバスを目指す傾向が強い。

しかし、H. D. Brown が言うように、“Communication is qualitative and infinite; a syllabus is quantitative and finite.” (1987: 215) 「コミュニケーションは質的なもので無限のものである；シラバスは量的なもので有限のものである」ので、完全なシラバスというものはありえない。

IV. 中学校検定教科書の分析 (E. Berendt, JAAL Bulletin, No. 6)

ベレントによる中学校検定教科書 (1992年まで使用されたもの) の分析は会話分析の視点から行われたものである。具体的には、千葉大学の SEDB (Spoken English Data Base) と検定教科書の表現の比較をした。話し言葉の特徴は、About fifty percent of conversation is devoted to the maintenance of cooperative process in the interaction. (11) 「会話の約50%は相互作用の中で協力的過程の維持に向けられる」とし、それを可能にする managing the flow of conversation 「会話の流れをうまくする」表現が検定教科書には少ないことを指摘している。そして、Referential-Descriptive Meaning (= the giving and getting of information; transactional purposes) 「指示的・説明的意味 (情報のやりとりや処理的目的)」の表現が教科書には多いと分析している。結論で、Such imbalances in the textbooks undoubtedly reflect the misconceptions about what the spoken language is and for what purposes it is used. (12) 「このような教科

書での表現の不均衡は、話しことばがどのようなものであるか、またどんな目的に使用されるのかについての誤解を疑いなく反映している」と述べている。これは、教科書執筆者への鋭い警告である。

V. 話しことば (spoken language) の特徴

会話をするときには、まず、その場の状況 (situation) がある。さらに、会話をしている人はそれぞれ相手の人に対して寛容さ (tolerance) を持っている。また、話しことばには書きことばよりも余分な反復 (redundancy) がある。これは通じさせようとする意欲、コミュニケーションを積極的にはかろうとする態度の結果である。このように、situation と tolerance と redundancy が話しことばによるコミュニケーションの成立を助けている。したがって、限られた言語能力しかなくとも、積極的にコミュニケーションをはかろうとすれば、かなりの程度で通じるということになる。

もうひとつ重要なことは、会話では必ずしも完結した文ではなしに、断片や句がよく用いられるということである。すなわち、We often speak in fragments and not in sentences. ということである。さらに、意味の区切りでポーズをおきながら比較的短い抑揚の単位 (intonation unit) で話すのである。Chafe and Danielewicz (1987: 95) から例を引いてみよう。1行が intonation unit であり、..... はポーズを示している。

.....I just this year have...dropped down to teaching half time.

.....Which is what I've always wanted.

.....You know I'm happy about it.

.....It's a...terribly long commute,

.....a-nd now I'm going two days a week.

.....And just teaching one course a quarter.

.....Cause the regular...teaching load for us is six courses a year.

ここには、話しことばの特徴である言いよどみ、繰り返し (repetition)、言い替え (paraphrasing)、明確化 (clarification) や躊躇 (hesitation) なども見いだされる。

VI. 基礎英語 (1993年度) のシラバスとテキスト

筆者は、1991年度から1993年度まで、NHKの「基礎英語」講座を担当した。1年約40週で、月曜から土曜日まで週6回でそれぞれが20分の番組という構成である。年間を通して、ゆるやかな構成のひとつのストーリーを展開し、それぞれの週をひとつの単元 (unit) として位置づけ、それぞれ独立したスキットを展開した。月曜から木曜までの4回でひとつのスキットを展開し、金曜は全体のスキットの復習、土曜は歌やクイズなどのお楽しみ番組とした。

シラバスは Integrated Syllabus を目指した。構造と場面と概念と機能と主題をうまくかみ合わせることに最大の注意を払いながら、生きた現代英語を提示しようと試みた。1993年度のシラバスを次に掲載する。

NHK 基礎英語1993年度放送進捗予定表 (シラバス)

表現の内容	言語材料	例文
APRIL (4月: 4週)		
あいさつ		Hello, Sarah./ Hi, Mike.
会ったとき	be 動詞 (are)/ you	How are you? Great./ Not bad./ Okay./ Good. Fine, thank you./ Fine, thanks. Good morning, Vince.
聞き返す		How about you?/ And you?
別れるとき		Good-bye./ Bye(-bye)./ See you./ So long./ Take care.
初対面のとき		Nice to meet you, Mike.
提案する	Let's+動詞	Let's learn the A-B-C Song.

同意する		Okay.
自己紹介する	be 動詞 (am)/ I	I'm Mike.
感想を言う	it	Whew! It's long.
天候について話す	非人称の it/ 冠詞 (a)	It's a beautiful day.
他人を紹介する	be 動詞 (is)/ this	Vince, this is Hiroko.
出身をたずねる	be 動詞の疑問文	Are you from Japan?
出身を言う		I'm from Osaka.
名前を確認する		Are you Hiroko?
離れている人を指す	that	Is that Miss Sayers?
注意を向ける	冠詞 (the)/ 複数	Look at the cherry blossoms!
驚きを表す	they	Wow! They're beautiful.
場所をたずねる		Where?
場所を言う		There.
念をおす	..., right?/ he	He's a math teacher, right?
説明する	冠詞 (an)/ she	She's an English teacher.
ほめる		She's very pretty.
肯定で答える	Yes, ...	Yes, I am.
		Yes, he (she) is.
		Yes, it is.
否定で答える	No, ...	No, I'm not.
アルファベット		
MAY (5月: 4週)		
出身をたずねる	Where 疑問文	Where are you from?
		Where in Brazil?
		Where is Hans from?
		Where's she from?
	What 疑問文	What city?
推量する	現在形 / think	Berlin, I think.
能力をたずねる	Do 疑問文	Do you speak Spanish?
	Does 疑問文	Does he speak English?
肯定で答える		Yes, I do.
		Yes, he does.
否定で答える		No, I don't.
「知らない」と言う		I don't know.
ほめる	too	Your English is good, too.
		He's nice./ He's great.
意味を確認する	mean	You mean Hans Schmidt?

念をおす	3人称単数現在形の s	Hans speaks German, right?
好みをたずねる		Do you like music?
好みを言う	them	I love them./ I like rock.
同意する		Me, too./ Yeah, I do, too.
		All right.
「だれ」とたずねる	Who 疑問文	Who's he?
		Who do you like?
希望をたずねる	want to	Who do you want to go with?
理由をたずねる	Why 疑問文 / him	Why?/Why not?/Why do you like him?
		He's cute./ Because you like her.
理由を言う	because/ her	What kind do you like?
種類をたずねる	What 疑問文	Let's go to a movie sometime.
提案する	Let's/ sometime	Let's go with some more people.
	with/ some more	You ask Mike.
強く頼む		
JUNE (6月: 5週)		
希望をたずねる	What 疑問文/ want to	What movie do you want to see?
		Do you want to go to a movie tomorrow?
欲求を言う		Mom, I'm thirsty.
提案する	one	How about an old one?
	2 語動詞	Let's go ask her.
賛成する		Yeah! Good Idea.
場所をたずねる		Where is she?
		Where is the theater?
場所を言う	in	She's in the classroom.
	on	It's on my desk.
	under	Under all those books.
	at	It's at the mall.
	upstairs	Your father is upstairs.
	near/ doesn't	Sarah doesn't live near the mall.
	outside	He's outside.
所有をたずねる	have/ 所有の 's	Do you have today's paper?
	has	Well, she has a bike, right?
話題を変える	by the way	By the way, do you know Mike's number?
存在を表す	there is	There's one at two (o'clock).

現在の行動をたずねる	現在進行形	What's he doing? What are you reading? Who's he playing with? He's sleeping. He's playing basketball.
現在の行動を言う		It's a sad story, isn't it? Can I have some orange juice? Can I go to a movie tomorrow? Here you are. Hello!/ Is this Sarah?/ Yes, it is./ This is Vince./ Is Mike there?/ It's for you./ It's Lori.
同意をもとめる 許可をもとめる	付加疑問文 can	
ものを差し出す 電話で話す		
義務を表す 時間をたずねる 時間を言う	have to What time...?	I have to ask my Dad first. What time's the movie? Four o'clock./ It starts at four. Let's meet at 3:30.
確認する 可能を示す 予定、計画を話す	否定疑問文 can be going to	Don't you have homework? I can do it tonight! Are you going to ride your bike? My dad is going to take me. We're going to see <i>Modern Times</i> .
値段をたずねる 念をおす 数 (1-10)	How 疑問文 ..., okay?	How much is it? Bring about six dollars, okay?
JULY (7月: 4週)		
予定をたずねる 日時をたずねる 予定、計画を話す	When 疑問文 現在進行形	Do you have any plans? When is it? My family's going to the park tomorrow.
存在を表す 所属を示す 能力を示す	there are in can	Are there many floats? Are you in a band? I can play the flute. Can you play the guitar.
	肯定/否定 not...either	Yes, I can./ No, I can't. I can't sing either.
必要を表す	need	They need more work. We don't need a flute player.

比較を表す	最上級 (best)	Mitsuo doesn't need practice.
	比較級	I sing best in the shower.
意図をたずねる	動詞 do	Sing a little slower.
注意をひく		What do you do?
間をとる		Say, Mituo... .
命令する	命令形	Let's see... .
	否定命令形	Bring it and I can help you.
ほめる	be good at	Don't worry.
意見をたずねる		He's really good at the guitar.
意見を言う		What do you think of the band?
調子をたずねる	How 疑問文	Well, they're not bad, actually.
		How's it going?
AUGUST		
夏休みシリーズ (4月-7月の復習)		
SEPTEMBER (9月: 4週)		
歓迎する		Welcome back to school.
同意する		Yes, that's right.
月をたずねる	What month...?	What month does your school year start?
存在を表す	there are	There are lots of differences between Australia and Japan.
スポーツについてたずねる		What sports do you play?
スポーツについて言う		I play football.
比較を表す	最上級	He's the best on our team.
	比較級	The Redskins are the greatest.
		Carlos is much better than I am.
		Michael is faster, stronger, bigger, and can jump higher.
選択をたずねる	or	Who is a better basketball player, Michael Jordan or Isiah Thomas?
好みをたずねる		Who's your favorite team?
意見をたずねる		Who's the best team in America?
意見を言う	maybe	Maybe the Redskins, maybe the 49ers.
未来を表す	will	We'll play them here, at "home."
		It will be cold in New York then.

提案する	Shall we...?	Shall we catch the bus downtown at 2:00?
曜日の名		
月の名		
季節の名		
OCTOBER (10月：4週)		
注意をひく		Listen, I'm going to be late for dinner.
理由をたずねる		How come? Why can't we use calculators on the test?
可能性を言う	may	I may have to take the city bus home.
時間をたずねる	What time will...?	What time will you be home?
時間を言う	not until	Maybe not until seven.
必要がない	don't have to	You don't have to eat a hamburger.
推量する		Guess what?
許可をもとめる	may	May I ask a question, Mr. May?
義務を表す	must	You must study "fractions."
総称的な「人々」	they	They use calculators in the real world.
忠告する	have to	You have to think for yourself.
了解する		I understand.
謝る	be sorry (for)	I'm sorry. I'm sorry for being late.
希望を言う		I hope so.
強く提案する	should	We should talk more about Australia. We should have a party this year.
禁止を表す	否定命令形	Don't skip any.
数 (11-20)		
NOVEMBER (11月：4週)		
人数をたずねる	How many...?	How many players can make the team?
好みを言う	like to	I like to watch it on TV.
決断できない	between	I can't decide between soccer and

忠告する	not...yet	track.
忠告をもとめる	(had) better + 動詞	I'm not sure yet.
確認する	付加疑問文	You('d) better decide soon.
理由を言う	won't/ get hurt	What's your advice?
能力をたずねる	any	They're right after school, aren't they?
同意する	can	Well, maybe track is better, because you won't get hurt.
様子を述べる	look	Is he any good?
念をおす	you know	Can you help him out?
激励する	命令文	Sure, no problem.
情報をたずねる	tell...about	Me, neither.
招待する	Would you...?	He looks fast and strong.
提案する	Why don't you...?	He's a good player, you know.
教 (40-90)		Do your best.
		Can you tell me a little bit about Thanksgiving?
		Would you like to come over to my house and have dinner with us?
		Why don't you come over at five on the 23rd?
DECEMBER (12月: 5週)		
誘う	Do you want to...?	Do you want to go for a walk?
念をおす	付加疑問文	The Smithsonian Institute has a lot of museums, doesn't it?
驚きを表す		That's amazing.
確認する	mean	I mean that thing in front.
同意をもとめる	否定疑問文	Isn't the mall beautiful?
好みをたずねる	like to	Do you like to jog?
嫌いだと言う	not...at all	I don't like jogging at all.
近い未来を表す	現在進行形	What are you doing after school today?
意見をたずねる		It's beautiful, don't you think?
意見を言う		What do you think of it?
		Well, it's boring. I think.

冬休みシリーズ（9月-12月の復習）

JANUARY（1月：4週）

過去のことを言う	肯定文 was	It was fantastic. That was nice.
	had	I had a great time.
	規則動詞	I just stayed here.
	不規則動詞	My mother sent me some cookies. I got a bunch of CDs.
過去のことを たずねる	疑問文	Did you get a lot of presents? What did you do for Christmas break? How was your Christmas?
過去のことを確認する 比較する	否定疑問文 the same as best...of all	Didn't you take art last semester? It's the same as last year. I like math best of all.
期待を表す 理由をたずねる 理由を言う	Why did you...?	I'm looking forward to it. Why did you take art? I couldn't fit drama into my sched- ule.
同情を示す 終了したかたずねる		That's too bad. Are you finished with your paint- ing?
内容についてたずねる	about	What was "The Simpsons" about last night?

FEBRUARY（2月：4週）

天候について話す	現在進行形	It's getting really cold these days./It's freezing!/It's snowing.
	最上級	February's the coldest month in Washington.
	否定疑問文	Isn't it nice out? Isn't it lovely? What day is it?
月日をたずねる 許可をもとめる 様子を表す	Can I...? everything/ look	Can I borrow your mittens? Everything looks white. You look terrible.
要請する	Let me...	Let me take your temperature.

好みの選択をたずねる	Which..., A or B?	Which do you like better, winter or summer?
体の具合をたずねる		What's wrong?
体の具合を言う		What's the trouble?
		I don't feel well.
		I have a headache.
命令する		Take this to a drugstore and get your medicine.
忠告する	had better	You'd better see a doctor.
驚きを表す		What a surprise!
存在をたずねる		Is there something in it?
存在を言う		There was the 4th of July.

MARCH (3月: 5週)

春休みシリーズ (読み物「レ・ミゼラブル」)
(1月-2月の復習)

以上のシラバスは、統合シラバス (integrated syllabus) のひとつの試みであった。

次に、意味のある自然な談話を各スキットで展開しようとした。会話の特徴に注意を払い、話題の切り出し方やつなぎ方、人間関係を維持するための協調の原理、等に注意を払った。例をあげてみよう。

SKIT 17

Maria : Say, Mitsuo. You play the guitar, right?

Mitsuo: Yeah, I do.

Maria : Are you pretty good?

Mitsuo: Well, I don't know, but I play every day.

Maria : Great. Why don't you join our band?

Mitsuo: Okay.

Maria : Can you practice tonight, Vince?

- Vince : No, I can't. I have to do my homework.
Maria : Well, you can bring it and do it here.
Vince : Actually, it is Spanish.
Maria : Great! Bring it and I can help you!
- Maria : Let's see. What kind of music are we going to play?
Mitsuo: Let's make our own.
Maria : No, that's too difficult. We have to start with the basics.
Mitsuo: Okay. We can play oldies.
- Maria : Can you read music, Vince?
Vince : Um... No, not really.
Maria : Well, you have to learn.
Vince : Don't worry. I have a good ear.
Maria : We hope so.

Maria が音楽好きの友達を集めてバンドを作り、練習を始めるという場面設定である。ダイアログを書く時に、最大の注意は、会話の自然な流れを作り出すことに向けられた。基本的には、それぞれの初話が、抑揚の単位 (intonation unit) におさまるようにした。Grice の言う協調の原則 (the Cooperative Principle) にも配慮した。このスキットから具体例をいくつかあげてみよう。会話の切り出しに、Say, を、軽く確認する表現に ..., right? を、つなぎの表現に Well, や Let's see. を、いいよどみの表現に Um... を使用した。さらに、完全文だけでなく、Say, Mitsuo. / Okay. / Great. / No, not really. などの断片や句も使用した。全体のスキットは情報の交換だけでなく、人間関係の維持や相互交渉の表現を入れ込み自然な会話の流れにしてある。人間関係の維持に関わる表現は、Great. Why don't you join our band? / Well, you can bring it and do it here. / Don't worry. I have a good ear. / We hope so. 等である。3番目のスキットは全体が相互交渉になっている。

以上のように教材開発という分野は、応用言語学のさまざまな知見の影響を

受けている。そして、教材開発者は、学習者によりよい教材を提供できるように奮闘しているのである。

REFERENCES

- Berendt, E. 1992. "The Tongue and Its Employment: Implications for Language Teaching." *JAAL Bulletin*, No. 6: 11-14. Tokyo: JACET.
- Brown, H. D. 1987. *Principles of Language Learning and Teaching* (Second Edition). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Chafe, W. and Danielewicz. 1987. "Properties of Spoken and Written Language." In Horowitz, R. and Samuels, S. J. (eds). *Comprehending Oral and Written Language*. New York: Academic Press.
- Fries, C. C. 1945. *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. Ann-Arbor, Michigan: University of Michigan Press.
- Grice, H. P. 1967. William James Lectures, Harvard University 1967. Published in part as "Logic in conversation." In Cole, P. and Morgan, J. L. (eds.) 1975. *Syntax and semantics* vol 3 (Speech Acts): 41-58.
- Hornby, A. S. 1975. *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford: Oxford University Press.
- Howatt, A. P. R. 1984. *A History of English Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Hymes, D. 1966. "On Communicative Competence." In Brumfit, C. J. and Johnson, K. (eds). *The Communicative Approach to Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- リーチ, ジェフリー N. 著。池上嘉彦 河上誓作訳。1987『語用論』(紀伊国屋書店)
- Palmer, H. E. 1917/ 1968. *The Scientific Study and Teaching of Languages*. London: Har- rap. Republished by Oxford University Press, 1968.
- Palmer, H. E. 1921. *The Oral Method of Teaching Languages*. Cambridge: Heffer.
- Palmer, H. E. 1927/ 1995. *The Five Speech-Learning Habits*. 語学教育研究所編の *The Selected Writings of Harold Palmer* Vol. 2 『パーマー選集』第2巻(本の友社, 1995)に再版。
- Richards, J., Platt, J. and Weber, H. 1985. *Longman Dictionary of Applied Linguistics*. Lon- don: Longman.
- リチャーズ, J. プラット, J. ウェーバー, H. 編。山崎真稔 高橋貞雄 佐藤久美子 日野信行訳。1988『ロングマン応用言語学用語辞典』(南雲堂)

英文要旨

A New Direction in English Teaching Materials

Hisatake Jimbo

This paper tries to elucidate how such applied linguistics fields as pragmatics, discourse analysis and studies of syllabuses influence the materials development.

Pragmatics is concerned with the use of language in communication. As Dell Hymes (1966) stated, "there are rules of use, without which the rules of grammar would be useless." The rules of grammar and the rules of use do not exclude each other. The grammatical rules and the principles of language use are complementary.

Does the development of syllabus in teaching English reflect this fact? The idea of syllabus in teaching English as a foreign language probably goes back to Harold Palmer (1917) and his proposal for an Ideal Standard Program in which the learner goes through the three stages: Introductory, Intermediate, and Advanced. The idea of grading the teaching materials is at the center core of his program; for him "gradation means passing from the known to the unknown in easy stages."

The idea of structural grading, the linear sequencing of structures, was further developed by the structural linguist, Charles C. Fries. His sentence-pattern grammar created pattern practice and played a pivotal role in the development of the audio-lingual method.

Both Palmer's and Fries' syllabuses were primarily structural, grammatical items being arranged into an order judged suitable for teaching. The structural syllabus proved to be very useful, but the problem it presented was that the content of the materials is not very important in a purely structural syllabus.

To overcome this weakness, the idea of situation or context was introduced. A situational syllabus was created, in which the presentation of language materials is based on such situations as at home, at school, at the store, at the post office, at the airport, and so on. Many conversation textbooks tend to use this kind of syllabus.

The next stage was the attempt to combine the structural and situational syllabuses. The result was the situationalized structure syllabus, in which the structure is first selected from the grading system and then a situation is created that will demonstrate that structural point.

The most innovative syllabus we have so far is the notional-functional syllabus, in

which language content is arranged through notions (= concepts and meanings) and functions (= speech acts). This syllabus has been greatly influenced by such sciences as pragmatics and discourse analysis.

For the past two decades many writers of English textbooks have been greatly indebted to this new syllabus. The present writer of this paper is no exception. I attempted to integrate structural, situational, and notional-functional syllabuses in the 1991 and 1993 NHK Basic English programs. I tried to maintain the delicate balancing of topics, structures, situations, notions and functions. Both programs presented interesting content for real and false beginners in meaningful and relevant spoken discourse. Much attention was given to the characteristics of spoken English with the aim of helping learners gain basic communicative competence.